

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐郡島郷町海士
電話2-9772

海士町の取組紹介

海士町郷土学習本 「あままるリサーチ」 作成中!

海士町では、令和6年度から、教育委員会伝承郷育係が中心となって、『海士町郷土学習本「あままるリサーチ」』（以下「あままるリサーチ」）を作成しています。

海士町では、教科等の学習を行う際、採択している検定教科書に加えて、「私たちの海士町」という副読本を活用してきました。現在海士町の学校で使用している「私たちの海士町(四)」は、平成15年に、当時の海士小学校・福井小学校・海士中学校の先生方が作成の中心となって、多くの取材活動をもとに作られた本であり、長く学校で愛用されてきました。

平成15年と言えば、NHK「新プロジェクトX」挑戦者たち」でも取り上げられた、海士町の大転換期にあたります。財政的に厳しいこと

が想像に難くないと思うと、作成された方々の熱い思いに、本当に頭が下がります。しかしながら、「私たちの海士町(四)」の発行から22年の時が経ち、海士町の現状も大きく変わってきています。これまでの海士町の歴史や文化を伝えつつ、これからの海士町の社会や未来を考えていくための愛読書とするため、私たちの海士町の改訂版となる「あままるリサーチ」を作っています。

「あままるリサーチ」は、いわゆる紙の書籍ではなく、タブレット端末などで閲覧可能な電子書籍の形で作成しています。電子書籍化することにより、

- ① 激しく変化する社会に対応し、内容を更新していくことが容易となる。
- ② 本に掲載された情報以外へのアクセス(動画、音声など)が可能となる。
- ③ 拡大・縮小表示、音声読み上げなどの機能により、ユニバーサルデザインの視点に立った教材にできる。
- ④ 学校での活用に留まらず、多くの方に読んでいただけるようになる。

など、多くのメリットが生まれます。子供たちの海士町に対する学びがこれまで以上に深まるよう、精一杯作成に尽力していきます。(福山貴司)



キャンプがつなぐ、 世代と地域の架け橋

海士町では平成4年より、地域の自然と人とのつながりを活かした教育事業として「アドベンチャーキャンプ」を開始し、令和6年度までに計26回開催され、町の主要行事として定着してきました。倉田海岸という人里離れた過酷な環境で、参加者が協力して困難を乗り越えることを目的としました。しかし、近年は、気温上昇による熱中症リスクの高まりに加え、船舶・船員の確保や物品搬送の困難化など、運営上の課題も山積し、従来の五泊六日の野外活動の継続は困難となりました。

このような状況を踏まえ、安全確保と運営負担の軽減を目的に実施形態を見直し、令和7年度は、新たに「あままるリサーチ」を企画しました。旧御波小学校を活用した御波公民館を生活拠点とし、屋内休息スペースとテント泊を組み合わせた三泊四日の構成とすることで、安全かつ快適な活動環境を整備しました。参加者は小学五年生から中学三年生までの計二十九名で、野外炊飯やフィールドワーク、協働型アクティビティなどを通じて、主体性・協働性の育成を図りました。地域住民の皆様には事前のあいさつ回りから温かく迎えていただき、「子供の声が聞こえるのがうれしい。」との声も寄せられました。期間中も活動の見守りや差し入れなど、積極的な関わりが見られ、地域と子供たちとの自然なつながりが生まれま

した。これは、従来のキャンプにはなかった地域との関係性という新たな視点を獲得の機会となりました。地域住民との協働を通じて、子供たちが社会の一員として育っていく過程は、社会教育の実践として重要な意義を持つ

と考えます。また、四年連続で参加した中学三年生が、来年度は募集対象外となるにもかかわらず、スタッフとしての参加を快く引き受けてくれました。「ぜひ参加させてください。」という言葉には、キャンプへの愛着と、次の世代を支えたいという意志が込められていました。今年のスタッフにも、かつて参加者だった若者が複数おり、こうした循環が自然に生まれていることは、キャンプが地域に根ざした人づくりの場として機能している証です。

ひとつの事業を通じて人と人がつながり、関係が広がっていく。こうした営みは、地域の未来を担う人材の育成につながる可能性を秘めています。今後も小さなつながりの積み重ねを大切にしながら、地域に根ざした教育活動を継続していきます。(池田高理)



かけはし

扶養・単身赴任手当は一年に一回、住居・通勤手当については三年に一回の検認を実施しています。今年度は全手当の検認を行い、お陰様で全対象者の手当の検認書類が揃いました。

これに合わせ検認事務を行う事務グループを訪問した時に感じた話です。

学校事務のみなさんの活動の話や、日頃から学校事務同士で情報交換をしたり、研修の形を少しずつ変えたり、ツールで繋がったり、他の良い取組を我がとこに取り込めないか考えたりと、職務の向上に努めておられる姿がありました。また「人がつながる」ことで、質の向上・時間短縮・心理的安心感を獲得している様子も伺えました。

グループという枠組みだけでなく、取組を「変化」させていく職員の日々の知恵や努力が生まれている環境が、素晴らしいと感じています。(渡邊友美)

